〈韓国と北欧の学校図書館見学記〉

北欧の学校図書館

家　城　清　美

１．北欧へ

2006年８月20日から27日の８日間、全国学校図書館主催の海外学校図書館研究視察旅行に参加した。視察国は、フィンランド、スウェーデン、デンマークの３カ国、フィンランドでは、公共図書館１館、教育省１、私立中高等学校１校、公立小中学校１校。スウェーデンでは、市立図書館２館、公立高等学校１校、公立小学校１。デンマークでは、市立図書館１館、公立小学校１校、公立小中学校１校、リソーセスセンター２施設を視察した。短期間であったが、期間中に小学校２校、小中学校２校、高校１校、中高等学校１校、公共図書館４館、教育省１、リソーセスセンター２ヵ所を視察した。

視察の目的は、①各国の学校図書館を訪問し、学校図書館の組織、メディア、施設・設備、および教育活動にどのように関わっているのか、その実情を視察する。②学校図書館を支援する機関・施設を訪問し、事業内容、施設・設備、活動内容を視察する。③現地の学校図書館・教育関係者と意見交換をおこない、交流を図る。④公共図書館、地域の文化施設を訪問し、その実情を視察するというもので、これについては、全国学校図書館協議会から報告されている(1)。国際的に学力が高い北欧、なかでも、フィンランドはPISA(2)の学力調査の結果が世界１位で、特に日本人が苦手とした読解力において大変高い評価を得ていた。

視察直前まで、主催者と参加者の間には、フィンランドに行く。読解力、本を読む力は何処で養われるのか、それは学校図書館ではないだろうか。そのような力を培うために、学校図書館はどのような活動をしているのだろう。ぜひ、それを見てみたいというような期待が溢れていたように感じた。

私は以前からPISAに関心を抱いていたので、この視察にはぜひ参加した

いと思っていた。記述式の設問に答えられる。言い換えれば、生徒一人ひとりが自分の考えを述べられる力をどのように養っているのか、そのためにはどのような授業がおこなわれているのかに関心があった。とりあえず、自分の目で見てみたかった。このような理由で、視察は３カ国のうち、フィンランドの教育への関心は高いが、スウェーデン、デンマークについては、何も知らないまま、日本を飛び出したような状況であった。

２．北欧３ヵ国の事情

北欧３カ国についてであるが、日本より高い率の税金を納めるが、教育、医療などの福祉に関しては原則無料である。例えば、フィンランドでは、公立、私立学校の区別なく、国は予算を出すことで、学校を束縛することはない。学校の予算はまとめて校長に渡され、それをどのように使おうと自由で、どこを重点に予算を使うかは、校長の裁量によるところが大きい。その校長もなりたい人が立候補して、承認されれば校長になれるとのことで若い校長が多いとのことであった。カリキュラムについても、文部省が大雑把なガイドラインを出すが、教科書の選択などは、最終的には学校や自治体が決める現場裁量である。

デンマークでも、教科書は現場の教員が選択し、校長が承認すればそれを採用することができる。３ヶ国とも、教科書は貸与方式で、生徒は自宅に教科書を持って帰らない。学校で授業のとき使うだけで、書き込みも禁止されていた。

また、３ヶ国とも、教員も、司書も一度採用されると、人事異動はなく、現場での経験を重視し同じ職場で働き通せるとのことであった。

北欧では、学校は９月に始まる。すこし前から授業をおこなっている学校の授業風景を垣間見ることができた。それぞれの国とも、１クラスの生徒数は25人前後と少人数だが、そのような人数でも、複数の教員が教室にいる光景を多く見た。

自然環境については、秋冬期の日照時間が大変短い。３ヶ国の中で、一番南に位置するデンマークの2005年12月の日照時間は、33時間だったそうで、生活環境も我々と随分違うことに驚かされる。冬の長い国である。私たちの

訪れたフィンランド、ヘルシンキ東部イタケスクでは、地下街が発達し、地下に大きなショッピングセンターがあり、その近くの複合施設の建物に公共図書館が入っていた。

３．国づくりは教育から

それぞれの国で取り組まれた教育改革の発端は、経済不況で試練を浴びたことにある。西ヨーロッパ諸国や、近隣のロシアに挟まれ、スウェーデン900万人、フィンランド、デンマーク500万人と３ヶ国とも人口の少ない国である。北欧の国が、経済的、政治的に自立し存在していけるかどうかは、国の大きな課題である。生活を保障するために、高い税金を払い、国を支えられる生活力のある国民を育てなければならない。そのためには、一人ひとりを大切に教育しなければならない。その教育改革に、国をあげて取り組んでいる。

林業国であったフィンランドは、日本と同じ時期に経済不況に遭遇し、それを契機に、第一次産業から一気に、IT 産業への道を歩んでいる。スウェーデンは政治的には中立を保っているが、自国で陸海空軍を配備している。その一方で、北欧の中で、移民の受入を積極的におこない、人口900万人のうち150万人、人口の約６分の１の移民を受け入れている国であった。その移民の教育も重視していた。

資源に恵まれた国ではないが、原子力発電には依存せず、風力発電のような自然エネルギーを使う道を選んだデンマークは、ゴミのリサイクルにも力を入れている。そして、そのデンマークは、学校図書館とそれを支援する体制が全国に網羅され、今も進化し続けていた。

４．視察した図書館

4-1 フィンランド

フィンランドの学校図書館はどのような働きをしているのだろうかという期待は、ことごとく打ち破られた。それは、徹底的に合理化された環境のなせる業である。体育館は複数有しているのに、プールや運動場がない学校がいくらでもあるとのことであった。学校から2～300メートルで行ける公共図書館が複数ある。それならば、市民皆が利用できる公共図書館を充実させて、

フィンランド・イタケスクス図書館
子どもコーナー

ような、施設の合理的な利用がされていた。

学校図書館と公共図書館とでは、役割が違うのではないだろうかと思ったが、現地の図書館員はそのことを認識していなかった。

視察した、ヘルシンキ東部のイタケスク公共図書館（Itakeskuksen

フィンランド・イタケスクス図書館
入り口付近　大きなカウンターはなく、コーナーごとに小さなカウンターがある
貸し出し・返却はコンピュータ化されていて、カウンターでおこなわない

いろいろな資料を使わせるほうが、小・中規模の学校図書館を各校につくるより効果的だと考えるからである。他に、運動場についても、公共の施設を昼間は、生徒が利用し、その後、仕事帰りの大人が利用する。学校給食センターで近隣の老人ホームなどの食事も一緒につくるという

フィンランド・イタケスクス図書館前
お話会をまつ近くの幼稚園児たち

Kirjasto）は、1988年に文化センターと併設するヘルシンキ初の複合施設の建物の２フロアーを占有し、床面積2040㎡を有する。国の人口が500万人の中で、ヘルシンキには25の公共図書館がある。この図書館は蔵書数10万冊、新聞は海外の新聞合わせて400種を所蔵していた。

貸し出し冊数は、１人50冊、DVDの貸し出しは１人５種、４週間借りられる。年間1000万冊を貸し出している。

図書館に実習に来ている学生が、近くの幼稚園の子どもたちを、お話の部屋に案内し、絵本を読むという活動もおこなっている。我々の訪れた時は、「魔女の話」の週で、魔女に扮装した実習生が子どもたちを館内に案内していた。学校との連携では、学校を回って、読書推進を呼びかける。また、教師が生徒を連れてくることもある。授業ができる部屋も用意されている。公共図書館として、学校に資料を貸し出すことは殆どなく、教員か生徒に貸し出している。

フィンランドでは、ひとつには、物価が高いので、図書館で借りるという考えがあること。もう一つには、読書好き、子どもたちは寝る前に、親に本を読んでもらうのが、習慣である。新聞もよく読むようで、小さい頃、記事の内容が理解できないときは、父親に尋ね、大きくなれば、記事の内容で、親と議論をするというような話も聞いた。分館は新聞を１年分保存している。中央図書館は100年分の記事が無料で見られるとのことであった。私の見学したフィンランドの学校図書館は、生徒が調べるために利用する資料を所蔵しているというよりは、教員が教材づくりのために利用する資料を保管しているという感じが強かった。私立学校であるラウタサーレン総合学校（Lauttasaaren Yhteiskoulu）では、生徒にとって一番身近な図書館として学校図書館が必要であると思っている数名の教員によって、１教室分位の広さの図書館が自主的に運営されていた。資料が少ないせいもあって、分類法にのっとって資料が配架されてはいなかった。しかし、生徒には人気がある。もう一つ訪れた公立のクォパヌンメン小中学校（Kuoppanummem Koululeslus）の図書館の資料棚は施錠されていた。垣間見たクォパヌンメン小中学校の小学校低学年の授業では、家庭科の授業で、少人数の生徒が、教員を取り巻き、教員の動きをみながら、ミシンのかけ方を習っていた。また、木工の授業では、木

フィンランド・ラウサターレン中・高等学校図書館で新聞を読む高校生　新聞は人気がある

材の計測方法やのこぎりで木を切ることなど、こちらも、少人数の生徒が教員を囲むようにして、教員のする様子をみていた。親が手を取りながら子どもに教えているようなそんな感じがした。中学校の音楽の授業では、これからの学習計画を生徒が立てる。そのために教師が作成した質問プリントに、人ずつ答えていた。このプリントを通じて、自分は何を理解しているか、また何が理解できていないか判断し、今後の学習プランを自分で立てるというものであった。

フィンランド・「木工」の授業　つなぎを着ているのが教員　のこぎりで木をひく方法を教えている

知識を詰め込むだけでなく、自分と向き合い、考えさせる授業の工夫がなされていた。教育省で、子どもが小さいうちには、他人と競争はさせないという話を聞いた。自分に向き合い自分と競争させるとのことであった。今日は、（あることが）できない自分がいる。でも、明日はできる自分になろう。そのような教育を通じて、小さいうちに自信を持たせる教育をおこなっている。授業は科目横断型の授業が取り入れられている。世界には他にも、学力の高い国があるが、できる子どもとできない子どもの格差が大きい。しかし、フィンランドでは、男女や家庭の経済力によるできる子できない子の格差が少なく、全員ができるように教育していることを教育省の担当官は自負していた。

4-2 スウェーデン

学校図書館に関して、駆け足で通り過ぎたスェーデンについて、特筆することはない。スウェーデンでは、公共図書館への体制、司書への待遇は、確立されている。博士号を取得している司書もおり、給与面でもそのような司書は保障されている。公共図書館の１スタッフとして、学校図書館専門の司書を配備し、学校や学校図書館からの相談に応対しているところもある。しかし、学校図書館に関しては、司書配置などを決める法律がない。小さな学

校図書館はあるが、財政事情の悪化により、図書費がここ何年か支給されていなかったり、司書がいる学校やいない学校など、それぞれのコンミューンの状況によってまちまちであった。その地域に移民が多く、スウェーデン語を話せない子どもが多ければ、公共図書館に任せるのではなく、移民の子どもたちがスウェーデン語を習得できる機会を、大規模で最先端の機器を配備した学校図書館が担っていた。校長の裁量にもよるが学校図書館の格差は大きい。この国では、学校図書館に足りない資料は、公共図書館が学校図書館に貸し出していた。

スウェーデン、クムツホルム図書館（Kungsholmens Bibiliotek）で検索をする利用者

4-3 デンマーク

今回のこの視察で、印象に残ったのは、デンマークの教育体制と学校図書館であった。

デンマークは九州ほどの大きさである。学校数は多い。この10年間で大幅な教育改革がなされ、授業形態が大きく変わり、テーマ学習が導入された。いわゆる科目横断型、複合的な授業が始まったのである。そのような学校図書館の活動を保障するために、日本の文部科学省にあたる省で、各学校図書館には２名の学校司書と２名のプログラムが組め、コンピュータについて教えられるIT関係の教員を配備し、４名で学校図書館を運営するよう法律が定められた。

テーマ学習は各教員の専門教科の範囲を超えて教える必要があり、教員はチームを組んで授業をするようになった。これは、子どもの学習する姿勢がかわったことに要因を見出すことができる。訪問先のウェアボー小中学校(Varebro Skole) のミケル・ハンセン (Michael Hansen) 氏は、「子どもたちを一方的に教えられなくなった。子どもたちが変わって、多角的に吸収するようになっ

た」と子どもの学習スタイルの変化を捉えていた。

デンマークでは、教材が悪ければ、よい子どもは育たないという認識がある。数学の教師が数学を教え、英語の教師が英語を教えという専門の授業であったものが、数学と英語の混じったような授業に変わり、設定されたテーマによっていろいろ調べるようになった。例えば、自然破壊であれば、その理由、火事、地理、歴史などについて教師は教えなければならなくなった。つまり、専門一つ教えていた教員が他のことも知らなければならなくなったのである。調べるためのよい資料を揃え、教員が尋ねに来たら、答えをだせるような資料を提供できる図書館が重要になってきたのである。

デンマーク・ウェアボー小中学校図書館の書架　ミケル・ハンセンが赤いペンキを塗って再生させた書架

授業形態の変化で、子どもたちも、図書館によく相談に来るようになり、このような学びを支援できる学校司書が必要になった。学校司書は各学年に適切な資料を知っていなければいけないし、所蔵する資料をすべて把握しなければならない。

もう一つ例をあげるなら、デンマークのよき時代、中世について教員が学校司書に尋ねに来ると、学校司書は、教えるための資料を提供する。そして、教員は集めた資料から教材を作成し、テーマを子どもたちに与える。子どもたちは、テーマ選んで、細かく調べる。その過程で、課題について生徒が聞きに来るが、もともとは学校図書館の資料であり、学校司書は授業内容を把握していて、生徒の質問に的確に答えられる。３年と５年というように、２学年合同で

質問に気軽に答えるウェアボー小中学校の学校司書トーベ・アナセン（Tove Andersen）さん

調べることもある。同時に図書館にやってくれれば、学校司書が授業を取り仕切る。生徒が調べ、まとめることが終われば、幾つかのグループに別れ、一緒になって調べたことを劇にする。生徒の調べたことを教員が脚本化し、生徒たちがそれを直して、演じるのである。劇中の食べもや服装なども相談する。劇は、教員がビデオにし（生徒にビデオの撮り方を教えることもある）、生徒に見せ、互いに評価しあうというのが、調べ学習の一連の流れで、劇にし、演じるという方法は国内で高く評価されていた。

ウェアボー小中学校図書館　隣にPCルームがある

ウェアボー小中学校の校内に展示した生徒の作品をまとめて図書館に再展示

学校司書は、このような、調べ学習を通じて、子どもたちに自分の意見を言えるようになって欲しいと語った。

急なコンピュータで、ITに追いつかなければならなくなり、これに関する法律も整備されていて、生徒にコンピュータ・リテラシーを教える授業も始まっている。

4-3-1 デンマークの図書館スタッフの養成制度

デンマークでは、学校図書館の専門職員のことをSchool Librarianと英語では訳しているが、日本の学校司書とは大きな違いがある。学校司書になるには、まず教員として教える経験が必要で、教員資格を取得していないと学校司書になれない。学校図書館が教育の中で重要と認識され、学校図書館の専門職員の仕事も、教育的そして専門的な仕事と認められており、公共図書館の司書とは違う役割をもつと認識されている。

教員に専門教科があるように、学校司書には、図書館での生徒の学習活動の指導や援助のほか、教材の提供、教材を使った授業のコーディネート、機器操作について教科教員への教授、さらに、教科教員と授業をチームでおこなうという専門性がある。

フールサング小学校　図書以外の貸し出し教材　ビデオなどがある

読み聞かせについては、学校司書は、図書館に小さい子どもがいれば読むこともあるが、基本的にしない。読み聞かせは言語獲得の手段であり、教科教員がおこなうとのことであった。

このような学校司書と他の図書館司書の養成方法は全く異なる。他の図書館の司書は図書館学校で[3]養成され、書誌の専門家となるが、学校司書は教育の中で pedagogical advisement ができるよう、一般の司書とは違うかたちで養成される。学校司書が公立図書館の司書になることはなく、またその逆もありえない。学校教育の中で、教員や生徒の学習活動を、資料提供で支援するため、学校司書は pedagogical[4]という言葉で、公共図書館司書との違いを明確に区別されていた。

デンマークでは、学校司書は教員の一員で、教職につきながら CVU（Centre for Videregående Uddannelsery: Centre for Higher Education）で、学校司書の資格を１年から２年で取得する。講習科目としては、Information about and lending of educational material（教育資料についての情報と貸し出しについて）、Pedagogical advisement and guidance for teachers（教師のための教授法の助言や指導）、

デンマーク、フールサング小学校（Fuglsanggårds skolen）の学校図書館手前に低学年の書架、奥はスポットライトを当てた、高学年用書架

arrangement of courses（履修計画）、Pedagogical and technical advising relating to the use of IT in the instruction（授業の中でのITの利用に関する教授上、技術上の助言）[5]の４つである。この科目は２年前に再考されたもの、これらの科目は、常に教育の現状に即応できるよう検討され続けている。以前は、３カ月ほどで資格が取得できたが、現在は、資格を取得するのには、図書館に関する基礎科目120時間を含む642時間の講習を受け、１～２週間の実習もしなければならず、学校司書に高い専門性が要求されている。

学校司書は資料の分類もし、資料が図書館のどこにあるかも掌握している。さらにどの資料がどの学年に効果的なのかも把握しているので、子どもたちがやさしい資料で調べようとしているとき、年齢に応じた適切な資料を薦めることもある。

図書館の拡張や設備の充実を図り、自ら廃材で書架を作るなど、図書館運営にも彼らの力は大いに発揮されていた。経験が重要とされていて、教科教員も学校司書も自分から望まない限り、人事異動することない。「学校司書だけど、教科教員になりたいと思わないですか。」という質問には、「いいえ」と返答し、学校司書としての使命の強さを感じた。

4-3-2 デンマークの学校図書館の活動を支える体制

使命が確立された学校図書館の機能を支える体制として、教育センターの存在がある。コペンハーゲン市のCU（Center for Undervisingsmidler）は、デンマークで最大規模の教育リソースセンターであり、市内の65校の公立学校、71校の私立学校、教育機関、９校の高等学校と、20校の特別な学校と病院内図書館の支援を実施している。デンマークのCUのような教育センターの役割の特色として、学校への資料の提供、教員への教材の操作方法の指導、学校司書や教員の研修会の実施以外に、地域の文化行

デンマーク・コペンハーゲンのCU　図書やそれ以外様々な資料を所蔵している

事にも資料の貸し出しや展示の指導を行なうことも含まれている。CU長、ハンス・クレイブス（Hans Krebs Oversen）氏の説明では、学校図書館の必要性を、第一次と第二次大戦の間に感じ、1950年にその気運は高まり、1970年に基礎ができあがった。1976年に、国会で学校図書館のあるべき姿が決定され、それを機にCUをつくり、1989年から現在の機構が試行されたとのことである。創立当初は、小さな建物で活動を始め、いまは拡張され、大きな建物に移っていた。CU同士は、よく連絡を取り合っていて、分類番号の決定なども相談している。また、国会議員とも常に連絡を取り合いながら、CUの運営をしている。フィンランドでは、小中規模の学校図書館を造るよりは、充実した公共図書館を利用することで、経費や利用の合理化を図っていたが、デンマークでは、学校図書館と公共図書館の役割の違いを認め、CUや教育センターを設立することによって、多数必要な資料を一括で所有し、必要時に、必要な学校に回すことで、資料の活用の合理化を図っていた。また、専門職である学校司書によって教員に渡され、適切に活用されている。CUは教科書をはじめ、教材も集め、教員がいつでも閲覧できるようにしている。その中で、不十分な資料は淘汰され消えていく。また、100万円もするような高価な望遠鏡をCUが持っていて、操作方法から教えて、貸し出している。他にも、絵画の複製をはじめ、模型、剥製、パラシュートなども教材として貸し出している。これは、豊かな授業のために学校教育用に特化された資料提供のサービスである。資料の配送体制もコンピュータ化され、整備されていた。小・中・高には学校図書館用の教材センターが、大学図書館には大学図書館の教材センターがある。幼稚園には、公共図書館が資料を貸し出すこともある。

デンマーク・コペンハーゲンのCU　同一資料が30から50冊用意されている

コペンハーゲンでは、現在、図書館の統合がおこなわれている。2005年10月コペンハーゲン大学医学図書館と大学図書館が合併し、両図書館の管理職

も統合された。また2006年秋には王立図書館とも統合される。視察当時は、コペンハーゲン市では、CU も統合され、市が管轄していた CU は、今後国が管轄し、さらに機能の拡大をはかる。学校の教材センターは2007年からは、学校だけでなく、幼稚園から大学までに資料を提供するセンターになる。資料提供だけでなく、大学で教えている人たちの教育や教員になる人の教育をするセンターの役割も果たすことになる。

５．視察を終えて

短期間であったが、今回の視察旅行で感銘した事柄がいくつかあった。

第１は、国の情報政策である。３ヵ国とも直面しているのが、IT 化である。また情報を国の財産としており、それを国民一人ひとりが活用できるまでの過程に国が関わっており、国の費用でおこなわれている。各自治体で経費を負いながら進めるものではなかった。たとえば、現在、スウェーデンでは、出版されたものに関しては、国立図書館の担当者が分類を一括で決定し、総合大学、大学院まで全国統一している。

スウェーデンの公共図書館のラベル　児童書のラベル J･J･R　トールキンの分類

国立図書館のみ、国際分類法を使用し、他の図書館はスウェーデン独自の方法で分類している。アルファベットでカテゴリーに分けている。以前は全国に分類が決まったら知らせていたが、現在は IT 化により、ネットワークを構築し、国立図書館から、全国の小学校から大学図書館まで申請すれば、無料で書誌情報を流している。また、このような体制を取れるのは、人口も少なく、国立大学20校なので国がコントロールしやすいということもある。こどもの本の分類は、各図書館裁量であるが、現在はネットワークに配慮し、全国で統一している。

第２は、図書館の使命として、言語獲得の支援が明確であった。

まず、幼児の言語獲得を目的とするための資料、幼児のためと同時に保護

者が子どもに言葉を教えるための資料も隣接した書架に置かれていた。さらに、それぞれの国で外国語習得のための資料も所蔵されていた。年齢別に資料を探せるよう配架にも工夫が見られた。フィンランドでは、公共図書館が500種からの新聞を揃えていた。デンマークで驚いたのは、日本のプレイステーションを貸し出そうとしていたことである。「どのような目的で」と問いかけると、子どもはゲームが大好きで、このようなゲーム機器を操作しようとすれば、その言語を理解していなければ、操作できない。これも外国語習得のために貸し出すとのことであった。訪れた３ヵ国ともで、日本の「MANGA」は書架の広いスペースを占めていて、大変な人気であった。

スウェーデン、エリンスボルグス小学校（Elinsborgsskolan）の低学年の書架、見出しにアルファベットのそれに関する絵が添えられていて探しやすいようになっている　他の図書館でも低年齢の児童の書架にこの見出しはよく見られた

フィンランド、イタケスクス図書館のMANGA コーナー

デンマーク、コペンハーゲン図書館のMANGA コーナー

第３は、学ぶことに対する寛大な国の支援である。フィンランドでは、学費は無料。留学生に対しても、授業料、宿泊費、交通費すべて無料である。スウェーデンは、一旦就職にして、また、学びたいと思えば、学ぶことがで

きる。そして、学び終えるとその時点のキャリアで新たに就職できる。

デンマークでも同じで、何かひとつ特技があれば、生きていける国であるとの説明を通訳から受けた。意欲があり、実行すれば、それに対する評価が得られる仕組みになっている。大学に行くとき、子どもたちは、国から金を借りる。18歳で経済的に自立し、幾ばくかの金銭を家にいれることもある。

コンピテンシー（Competency）[(6)]という言葉が、フィンランドの教育省、デンマークのルンビィー市教育センター（Pædagogisk Center）の説明で出てきた。これは、日本において言われる「生きる力」に近いのではないかと思った。

教育に関して、日本ではゆとり教育の見直し、総合的な科目の見直しで、学力は各科目で、しっかり身につけさせるような方向に向かっているが、世界的に高学力を維持している国では、横断的な学習が進められている。フィンランドを含め、授業時間は日本より随分少ない。それでも、高い学力を維持できているのは、教材研究、授業研究が進んでいるものと思われる。縦割りで、各教科が授業時間の確保に奔走するだけでなく、科目横断的なカリキュラムの研究や、教科で得た知識を基に、自分で考えることの授業を、日本でも、発展学習として位置づける必要がある。社会人になっても通用する力を学ばせ、見につけさせることが大切である。

６．日本の課題

今回の視察から３点をあげる。先ずは、学校図書館のスタッフ体制である。デンマークのような体制が日本にも適しているように思う。現在、授業軽減などの処置がとられず、学校図書館の活動をするゆとりのない司書教諭や現場は司書任せになっている学校図書館がかなり存在し、法的に保障された教育的職員でありながら、小・中・高すべての学校での司書教諭の存在意義が明確とは言えない。選任・専従・専門の司書教諭として配置されている筆者は、司書教諭の存続に危機感を覚える。

日本の学校では、担任、教科を持たない教員は、教員や生徒から教員として認められにくい。日本では、教員は、先ず、クラス担任をし、授業で教えることに加え、クラブや生徒会顧問を務めること、公務分掌の任を果たすこ

とや、学校行事に参加して生徒や教員とともに活動することで、一教員と認められ、教員として充実感を味わう。しかし、専門職として１名だけの学校図書館配置では、開館時間があり、利用者が来館する限り、なかなか司書教諭が図書館を離れた行事に参加することは困難である。校内で１人、教科教員と違った形の業務をおこなっているような状況を他の教員に理解されることは殆どない。学校によっては、主任制度の下、主任が配置されていれば、校内への各分掌代表の会議へ出席することもなく、新しく司書教諭が生まれても、体制の変革がおこなわれていない。

デンマークのように、学校図書館のスタッフは、司書教諭２名、IT 関係の教員２名というように、現場の仕事に従事する図書館専従のスタッフが複数配置されることが望ましい。視察したデンマークの２つの学校でも、年度によって生徒数、教員数の変動があり、学校司書は授業をうけ持つことがある。以前は、日本のように多くの授業を持っていたようだが、学校図書館の必要性が高まった現在は、原則として授業は持たないようになっている。

複数図書館スタッフがいることで、誰かが図書館の運営をおこなえる。図書館運営に差し支えない程度なら、専門の授業を教えるということは、楽しいという司書教諭もいた。このような状況では誰もが、図書館業務に関われるので、チームワークは円滑で、明確に業務を分けず、お互いに業務を補いあえる。デンマークでは実際このように運営されていた。日本でも複数配置されれば、兼任であっても、学校行事への参加や、授業を持つことも可能であろう。司書教諭も同僚と働けることで、孤独になることもない。これからは、図書だけというのではなく、多様なメディアを活用する必要がある。そこで、司書教諭も IT 関係の教科に携わる教員とともに情報部やメディア部というような公務分掌の下、他の教員と共に働ける環境の整備が必要である。

次に、司書教諭に必要な専門的知識についてである。筆者の勤務校では、１年の３分の１から２分の１の期間、学校図書館を活用する授業が始まり、科目担当教員との情報交換も活発になった。学校図書館が学習活動の支援をしていることを実感する。学校図書館を利用する授業に関して、今どのように授業が進められているか、司書教諭が一番把握しているようになった。このように学校図書館が、授業に組み込まれると、図書館スタッフは教育的職

員であるほうが望ましい。そして、その教育的職員は、教材に関する専門的な知識を有している必要がある。

導入に視聴覚教材などを用いる教員もいるが、導入だけでなく、同じ授業内容で、教員が教室で講義形式の授業をおこなう場合と、視聴覚機器などを使って授業をおこなう場合、生徒の理解の違いはどのようなものかなど知り、それぞれの教材を効果的に提供ができるようなメディア論（教材論）や教育心理学、教育工学に基づいた知識が必要である。図書館の基礎科目については、当然習得していなければならないが、このような専門知識もあれば、教科教員と授業を協働で進める場合、司書教諭は自信をもって教材のアドバイスができる。

さらには、教員の意識とカリキュラムの改革である。教育資料や教材について科学的に学び、科目横断的な授業ができるような教員の養成も同時に必要である。図書館が必要とされるような教育改革がおこなわれない限り、学校図書館の将来は望めない。

短期間であったが、視察した北欧の国々から、教育とは何か、何のために学ぶのかと問う機会を得た、またその回答らしきものの光明を見たように思う。

視察したそれぞれの北欧の図書館には、赤く塗られた書架などの備品が目についた。その赤は、かの国々では違和感なく図書館におさまっていた。今思い出しても、その色がとても暖かく感じられる図書館の視察であった。

注

⑴　全国学校図書館協議会北欧学校図書館研究視察団『北欧に見る　学校図書館の活用』全国学校図書館協議会　2007年より。

⑵　PISA：PISA は OECD 加盟の49カ国。14－15歳義務教育最終年齢のときに数学、読解力、自然科学、問解決能力に関してテストを実施する。

⑶　視察中図書館学校で司書の資格をとると通訳より説明があったが、e-mail では司書資格は大学で取得するとある。

⑷　一般に pedagogical とは教育学的あるいは教授法的と英語の辞書では訳されてる。ここでは、学校司書が教授法に基づいて、資料の提供がおこな

え、提供した資料にそってティーム・ティーチングをおこなうことで、学習を効果的に進められたり、学びを深められるという意味において、教育的という表現が使われている感じがした。

⑸　デンマークで視察した､ルンビィー市教育センター(Pædagogisk Center)キエステン・トールさん(Kristen Tholle)からの筆者宛の e-mail 2006年10月24日付より表記はそのまま。

⑹　コンピテンシーとは、OECD が、教科の知識習得よりも、社会に出て使える力、実践的能力と規程している。福田誠治著『競争やめたら学力世界一』朝日新聞社　2006年 p197より。

（いえき　きよみ。同志社女子中学・高等学校司書教諭）